

1 初期生育を順調に

～生育を揃えることが重要～

高秀品率を目指す第一歩は、圃場での生育を揃えることです。そのためには一斉発芽、適切な育苗管理、順調な活着が重要になります。

①一斉発芽のポイント

一斉発芽を促すには、播種後に25～30℃の地温を維持するとともに、適度な水分が必要です。種子表面がザラザラしている「ほっこり133」の場合は、灌水量に注意し、水分過多を防ぐことが、より均一な発芽につながります。

②使用するポリ鉢の大きさ

育苗期間約1カ月、本葉3～4枚の苗が定植適期になるため、12cmのポリ鉢を使用するようにします。春先の天候不順で定植が遅れると、根鉢の小さいポリ鉢では肥料切れを起こして老化苗になりやすくなります(第1図)。

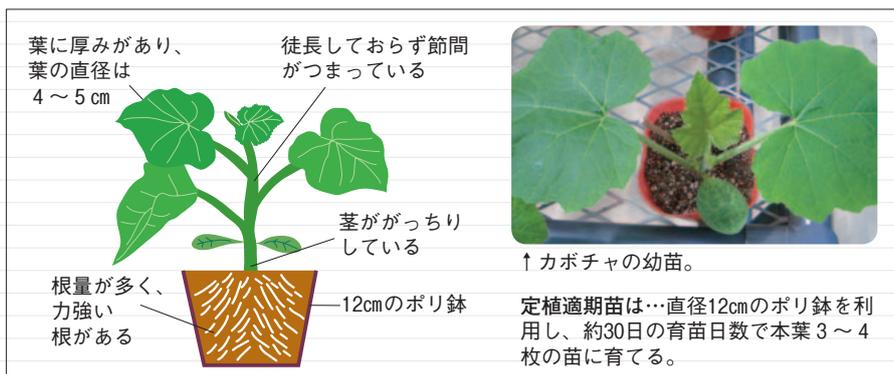
③育苗後半の温度管理

両品種とも雌花の着生がよいので、育苗後半の8℃前後での極端な低温管理は不要です。極端な低温で管理すると、「ほっこり133」では低節位の雌花が増え、低節位着果による変形果につながります。また、「ほっこり姫」の場合は正常な雌花分化が行えず、1番果の花落ちが大きくなるため注意が必要です(第2図)。

④順調に活着させる

定植時に15℃以上の地温を確保し、適期苗を定植するよう心掛けて、順調な活着を促します。特に、「ほっこり姫」は低節位から着果させるため、スムーズな活着が高秀品率につながります。活着が遅れると初期生育の不良が原因で、雌花の充実や分化が悪くなり、1番果の着果不良による1kg以上の大果や、つる先での花落ちの大きい果実の発生につながります(第3図)。

第1図 よいカボチャ苗の特長



安定した品質、高収量、高秀品率へ向けて!

高品質カボチャの栽培管理技術

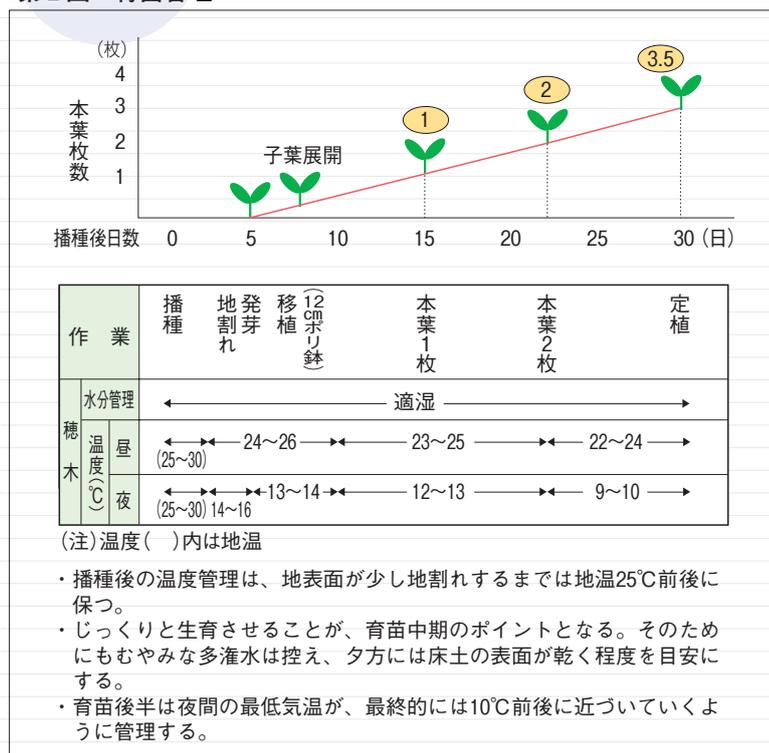


タキイ 研究農場
新 久紀

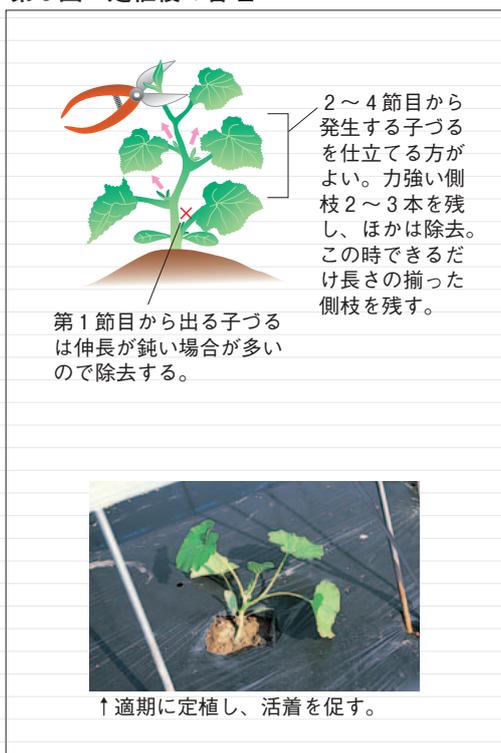
大玉粉質系カボチャ「ほっこり133」とミニの「ほっこり姫」は、大きさの違いはありますが、どちらも高品質、高収量が期待できる品種です。今回はこれら2品種について、安定した品質と高収量、さらには高秀品率を実現するポイントをご紹介します。

1 初期生育を順調に

第2図 育苗管理



第3図 定植後の管理



2 交配期前後に的確な管理を

～適切な節位で着果させる～

高収量を目指すには、品種に合った管理で着果を安定させ、順調な肥大につなげることが大切です。

①仕立て方と栽植密度

「ほっこり133」は1.7～1.9kg、「ほっこり姫」では700g前後の果実を収穫するため、「ほっこり133」では子づる2本仕立て、「ほっこり姫」は子づる3本仕立てにします。両品種とも葉が大きいので、1つる当たり40cm以上の株間を確保します。

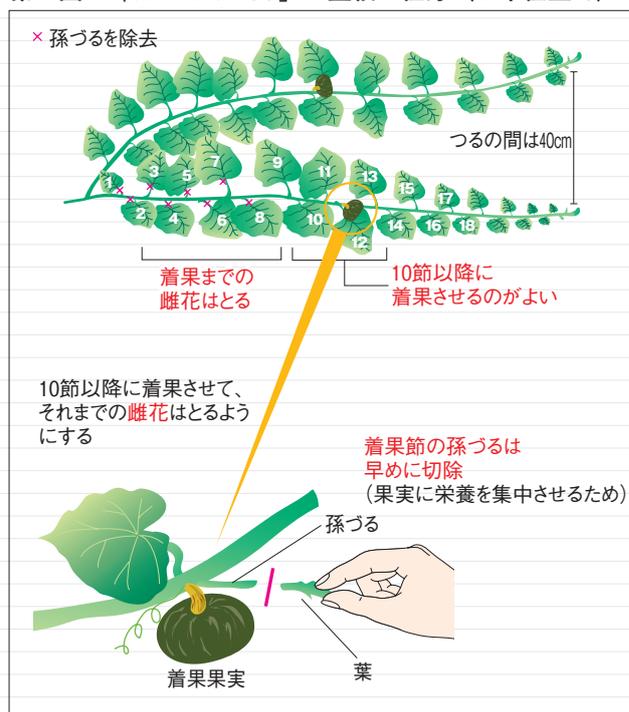
②着果節位と整枝

「ほっこり133」は雌花の着生がよい品種ですが、10節目以降に着果させるのが得策です。特に、7節目以下だと「ほっこり133」本来の肥大力を引き出す葉枚数が確保できないため、高収量が望めません。整枝については、着果節位までのわき芽は確実に除去し、同時に低節位の雌花も除いておきます(第4図)。



↑整枝適期のカボチャ。「ほっこり姫」の場合は、子づる3本仕立てにするとよい。

第4図 「ほっこり133」の整枝の仕方(2本仕立て)



2 交配期前後に的確な管理を

「ほっこり姫」は700g前後の果実を1つ当たり3果、1株で約6kgの収穫で大玉種以上の収量を目指します。5節目まではわき芽と雌花を除去し、6節目以降の雌花で順次着果を進めます。大玉種より低節位から着果させるため、樹勢維持を目的に6節目以降の雄花節の側枝は残し、放任としますが、肥大促進のため雌花節の側枝は除去します。

③交配期の樹勢判断

交配期の標準的な姿は、両品種とも株元の葉で横径45cm、雌花開花節付近の葉で横径30cmです。「ほっこり133」は生育期間を通じて強勢になりやすいため、交配期まではゆっくり株が作れるよう、元肥を「えびす」カボチャに比べて2～3割減らします。また、施設栽培では積極的に換気を行い、気温30℃を超えないよう管理するとともに、湿気の少ない状態を保ちます。それでも樹が強いようなら、わき芽を着果節位から5節程度つる先に整枝してから、交配を迎えるようにします。

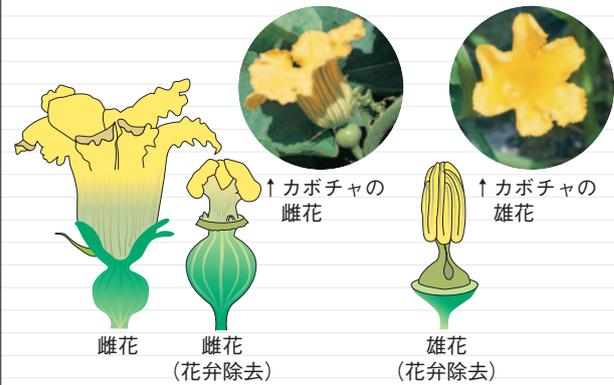
④果実肥大期の管理

「ほっこり133」の場合、雌花開花から3週間が果実肥大の旺盛な時期で、この間に過繁茂となると肥大が鈍ります。この時期には、葉の上面に子づる2本の生長点と、2～3本のわき芽の生長点が見えている状態を保ちます。交配期以降も力強い生長点が多く、樹勢が落ち着かないようであれば、生長点を摘芯して果実肥大に養分がまわるよう樹勢をコントロールします。

⑤追肥

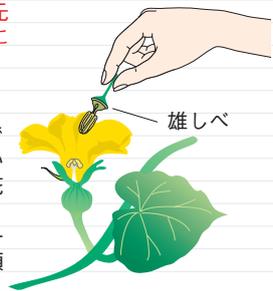
着果が確認できれば、樹勢を維持し、果実肥大を促すための追肥を行います。施肥量は、チッソ成分で10a当たり3kg程度が標準です。「ほっこり姫」では、1番果(株元)と3番果(つる先)の揃いをよくするため、追肥のタイミングが重要となります。1番果がピンポン玉の大きさでツヤがあるようなら、着果しているので直ちに追肥を行います。

第5図 カボチャの花と交配



受粉は通常ハチが自然に行うが雨の日やハチがない時、また株元近くの雌花で雄花が少ない場合には人工交配が必要。

人工交配は、早朝ほど着果がよくなるので、遅くとも午前10時までには受粉を完了させる。当日咲いた雄花の花弁を除去し、葯を雌花の柱頭になぞるように軽く触れさせる。この時、柱頭に花粉を均一に付着させること、強い力で柱頭に押しつけないことが大切。



↑交配期の「ほっこり133」の草姿。



↑「ほっこり133」の肥大期の草姿。



↑ピンポン玉程度の大きさで着果してきている。

3 収穫期前後の チェックポイント

～高品質な果実の出荷を目指す～

おいしいカボチャを出荷するには、生育後半の樹勢維持、収穫期的確な判断、キュアリング処理による食味と日もち性の向上が必要になります。

①うどんこ病対策

高品質な果実を収穫するには、収穫期までしっかりした葉茎を維持することです。高畝による排水性の向上、初期の株作り、追肥などと併せ、特にうどんこ病への対策が重要となり、生育時期に応じた効果的な薬剤散布を心掛けます。

定植後から交配期までは、発病前より保護殺菌剤を用いて予防に努めます。交配期以降は果実が肥大し、株への負担が大きくなる時期なので、薬剤を治療剤に変更し

て防除を徹底するようにします。特に、うどんこ病は降雨後の晴天により蔓延するので、降雨前後の防除を的確に行います。

②収穫期の判断

果梗部に縦方向からコルクが入り、それが果実付近で横方向にも広がり始めれば収穫適期です（第6図）。両品種とも、雌花開花から45～50日が目安となります。果梗部のコルク化と開花後の日数をもとに試し割りし、粉質感を確認してから収穫を始めます。「ほっこり姫」では、1番果（株元）と3番果（つる先）の雌花の開花に約1週間の差があるので、安定した品質の果実を得るには2回に分けて収穫するといでしょう。

第6図 収穫の目安



↑うどんこ病に侵されたカボチャの葉。裏面の方が病害がひどくなる。気づいた時には遅いので、こまめに葉の裏までチェックを。

③キュアリング

両品種とも粉質度の高い品種なので、キュアリングによる食味向上が必要となります。

キュアリングは、直射日光が避けられる風通しのよい納屋か、日覆いをしたビニールハウスで行います。積み上げ床は、地面にビニールシートを敷いて「すのこ」などを置き、通気性を高めておきます。また、果実の積み上げは3段にとどめます。処理期間は7～10日程度で、温度が30℃を超えないよう注意し、果梗部の乾燥を目安に処理を終了します。

キュアリング終了後は10～12℃で貯蔵すると、食味の低下も遅く、長期間保存できます。「ほっこり姫」は処理温度が高すぎたり期間が長すぎたりすると、果皮色の退色が早くなるので注意が必要です。



↑「ほっこり133」のキュアリング。食味向上をねらうなら、十分なキュアリングが必要。7～10日間程度行う。差別化の要なのでキュアリングはしっかり実施を。